

滋賀の文化情報誌
デュエット

Duet

2016 春 vol.119



特集

新撰 淡海木間撰 63 「朝霧の川」 中路融人

INFORMATION STATION 催し案内 2016 春

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS サンライズ出版の新刊案内

KAZARI

かざり —信仰と祭りのエネルギー—

特集

KAZARI

かざり —信仰と祭りのエネルギー—

会期：3月1日(火)～5月15日(日)

〔左右〕鳥獸花木図屏風 伊藤若冲筆（江戸時代）
エツコ&ジョー・プライスカレクション
〔中央〕善女龍王像 円空仏（江戸時代）園城寺蔵

甲賀市信楽町にある MIHO MUSEUM（ミホミュージアム）では、古代の仏教美術から江戸時代の曳山（山車）を飾る工芸品まで、日本に花開いた信仰の中の「かざり」の世界を見渡す特別展が開催されています。

滋賀県内の社寺や自治会が所蔵する作品が数多く出展されている点も本展の特徴のひとつ。

同館の桑原康郎学芸員に、企画段階からの経緯と見どころをお聞きしました。

〔右奥〕木造阿弥陀如来坐像光背（平安時代）洞照寺
〔左手前〕金銅大日如来坐像（鎌倉時代）敏満寺区



MIHO MUSEUM

住 所 甲賀市信楽町田代桃谷300

連絡先 TEL 0748 (82) 3411 FAX 0748 (82) 3414

入館料 一般1,100円、高・大生800円、小・中生300円
(20名以上は各200円引き)

アクセス JR 琵琶湖線「石山駅」から帝産バスで約50分／新名神「信楽 IC」から車で約15分、「草津田上 IC」から車で約20分

取材／編集部 写真／辻村耕司

お花見や春祭りの延長で、 ご来場の皆さんには楽しんでいただければと 思います。

MIHO MUSEUM 学芸員

桑原康郎さん

辻館長の「かざり」展への思い

今回の展覧会が催されることになったきっかけは何だったのでしょうか。

桑原 「かざり」展^{※1}は、当館の辻惟雄館長^{※2}が、日本美術のひとつの流れとして過剰ともいえるほど細かな装飾品が多くみられることに着目して、「かざり」という日常の言葉をキーワードに、1988年に展覧会「日本の美—かざりの世界」を監修なさったことに始まります。東京日本橋の三越本店で開催されたのですが、なんと2週間で10万人を超える来館者がありました。会場がデパートですから、国宝や重文の指定品はなかったのです。いまだに来館者数の記録は破られていないそうです。

それはすごい。

桑原 その後も日本美術の特質として「かざり」の系譜が紹介されてきました。縄文土器、平安の傘風流、戦国武将の変わり兜や陣羽織、金物飾り、それから江戸時代の町人が愛用した小袖や簪^{かんざし}などです。

弥生式土器ではなくて縄文式土器。桂

離宮ではなくて日光東照宮。能ではなくて歌舞伎。「わびさび」や禅の方向ではない、もう一方の日本文化として、「かざり」は国内外に驚きをもたらしたわけですね。

桑原 そうなんです。その辻館長が、今年3月で引退されることになり、「最後に、かざり展をやりたいな」とおっしゃったんです。宿へお送りする車の中でした（辻館長は鎌倉市在住）。「自分でもやり残しているのが「神仏の飾り」だと。「本来は一番最初にやらないといけないかったのに、最後になっちゃった」とおっしゃって。

館長のお気持ちはわかるのですが、2008年のサントリー美術館や京都文化博物館での展示は国宝や重要文化財のオンパレードで、究極の「かざり」展といえるものでした。これ以上何をするんだ！（笑）難しい課題だと思いながら、私の頭に浮かんだのは、2010年に九州国立博物館で開催された「湖の国の名宝展」の図録^{※3}だったんです。

滋賀県立琵琶湖文化館の所蔵品・寄託品の選りすぐりが公開されたものですね。

桑原 この図録の構成のように、滋賀の風景写真とともに仏教美術を紹介して、最後は曳山など、華やかなお祭りの装飾品を見せるという構成が頭にできあがったんです。その風景写真を担当なさった大津市在住の写真家・寿福滋さんの写真をパネルにさせていただき、壁面に展示しています。

※1 かざり展 1988年に三越百貨店（東京・名古屋・大阪）で「日本の美 かざりの世界」展、1991年にサントリー美術館（東京）で「日本をかざる」展、2002（2003年にジャパン・ソサイエティ・ギャラリー（ニューヨーク）と大英博物館（ロンドン）で「KAZARI: Decoration and Display in Japan, 15th-19th Centuries」展、2008年にサントリー美術館・京都文化博物館・広島県立美術館で「KAZARI 日本美の情熱」展が開催された。

※2 辻惟雄 （1932-）美術史学者。専門は日本美術史。東京大学名誉教授、多摩美術大学名誉教授、MIHO MUSEUM 館長。「奇想の系譜」など著書多数。

※3 「湖の国の名宝展」図録



「言われてみれば、金剛輪寺の華鬘や洞照寺の阿弥陀如来坐像など、「湖の国の名宝展」と重なっている作品も多いですね。

桑原 そこから、私と高梨純次さん（秀明文化財団）、当館の片山寛明学芸部長の3人で、具体的に展示する品をつめていきました。高梨さんが専門の仏教美術の名品をいろいろあげると、片山部長が「国宝の唐鞍を一度展示してみたい」とか言ったりしながら（笑）。

展示は、10章で構成されていますが、おおむね時代順と考えてよいのですか。

桑原 大きな流れは時代に沿っています。まず、仏教伝来から始まるので、奈良の法隆寺金堂の装飾品などをお借りしました。いずれもオリエンタルな印象を受けます。東大寺の伎楽装束は、2002年に行われ



プロフィール

くわばら・やすお／1967年、群馬県桐生市生まれ。1997年よりMIHO MUSEUM 勤務。「アジアのかざり展」「根来展」など、主に工芸品を中心に担当。

ていると考えられます。涅槃図は、
仏教の世界で、お釈迦さまの周りを動物や

植物が荘厳するものですね。若冲は、相国

寺へ釈迦三尊の莊嚴として、この世界を「動植綵絵」に描いて寄進したと。

いまのお話に出てきた「莊嚴」も重要なキーワードだろうと思います。

桑原「莊嚴」とは、辻館長がおっしゃる

には、サンスクリット語の「飾り」を意味する言葉から来ているのだそうです。仏教

的な世界を飾る、仏さまを讀えるために金銀などを材料に技術の粋を凝らした細工を施すんですね。

—— その意識は仏教伝来とともに日本に入ってきたと考えていいのでしょうか。

桑原 それまでの神道はあまり飾らない、非常にシンプルな信仰だったと思います

ここから7章につづくわけですが、平安時代から室町時代に神社の社殿に納められた「古神宝」と呼ばれる宝物は豪華で、一流

の技術者が作ったものが捧げられています
注目したいのは、これらの文様にペル

点です。現在、当館所蔵となっている紫檀したん

螺鈿宝相華鳳凰文平胡錄（重要文化財）は

のなかに向かい合った2羽の鳳凰を表すデザ

滋賀県から出展

盛りだくさんの内容ですが、本誌で紹

に限定させていただきたいと思います。

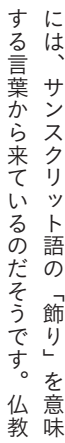
まず、第1章では、せんぶつ穴太廃寺出土の押出

桑原 大津宮とも関係のあるお寺で、押出

を焼いた像の表面に漆を塗って、さらに金

箔を貼ったものです。飛鳥から天平の時代

寺へ釈迦三尊の莊嚴として、この世界を「動



的な世界を飾る、仏さまを讃えるために金

施すんですね。

桑原 それまでの神道はあまり飾らない
非常にシンプルな信仰だったと思います。

の技術者が作ったものが捧げられています
注目したいのは、これらの文様にペル
シャなど西域由来のデザインが認められる

の
中
に
向
か
い
合
っ
た
2
羽
の
鳳
凰
を
表
す
デ
ザ

滋賀県から出展

にだけつくられたもので、非常に珍しく貴重なものです。

次は、近江の主要な古代寺院の瓦です。

桑原 瓦当（軒丸瓦の先端の丸い部分）にはハスの花をデザイン化した蓮華文が、甲

賀寺の軒平瓦③にはツル植物をもとにした唐草文様がほどこされています。これらは異国的な香りを残す、みずみずしい開花期の作品ですね。

「KAZARI」展に
滋賀県から出展されている文化財

赤番号=インタビュー中の
番号に対応

- =重要文化財
□=県指定文化財
△=市指定文化財
◇=町指定文化財

10 ○木造阿弥陀如来坐像光背

洞照寺

鬼瓦

南滋賀町廃寺出土
真野廃寺出土瓦

17 △近江八景欄間彫刻(大津祭源氏山)

(7ページ写真)

大津市埋蔵文化財調査センター

園城寺

金銅羯磨

金銅輪宝

金銅塔鈴

石山寺

14 ○近江名所図屏風

滋賀県立近代美術館

3 甲賀寺跡出土瓦

(7ページ写真)

穴太廃寺出土瓦

栗東市

4 方形瓦(サソリ文)

守山市

5 ◎金銅誕生釈迦仏立像

龍王町

善水寺

△西界曼荼羅図

飯道寺

阿弥陀寺

水口町(天神町)

水口町(作坂町)

7 ◎金銅唐草文両面磬

百済寺

8 ◎金銅透彫蓮華文華鬘

敏満寺区

9 ◇金銅大日如来坐像

多賀大社

11 茶吉尼天曼荼羅図

甲良町

愛荘町

12 茶吉尼天曼荼羅図

市神社

東近江市

13 ◇多賀大社参詣曼荼羅図

多賀町

16 △松虎図茶屋襖(宮川祭風々館)

岸駒筆

15 樂太鼓図茶屋襖(長浜曳山祭鳳凰山)

狩野永岳筆

6 □銅造花卉文片面磬

総持寺

長浜市

19 △飛翔鶴図水引幕(大津祭石橋会)

(表紙写真)

20 波濤に飛龍文様後幕(水口曳山祭作坂町)

21 △玉取獅子図内幕(水口曳山祭天神町)

(ともに7ページ写真)

とくに珍しいのは、ハスの花を横から見た姿を文様にした方形瓦⁴で、その形から「サソリ文」とも呼ばれます。南滋賀町廃寺の瓦を焼いていた窯跡^{かまど}だけから出土したもので、そのルーツは不明です。

2章には、善水寺（湖南市）の金銅誕生釈迦仏立像⁵があります。

桑原 東大寺の誕生釈迦仏立像（国宝）を継承する現存唯一の作例とされるもので、東大寺、四天王寺、法隆寺の奈良時代の作品の中に並べさせていただきます。

3章は、一般になじみがないであろう磐^いについて説明していただけますか。

桑原 磐は、お寺で用いる「鳴り物」の一つで、総持寺や百済寺のものはずっと打ち鳴らして使われてきたので、表面が摩耗^{まそう}しています。総持寺のもの⁶は、中央に蓮^{れん}と花弁、左右に草花文が、百済寺のもの⁷は左右に唐草文が施されています。

この全体は何の形なんですか。

桑原 具体的な由来はわかりませんが、中国古代の磐は、似た形をしています。これが本来の磐の形で、ほかに雲板型や蓮華型のものも集めてみました。つづいて代表的な堂内の荘厳具である華鬘を二つお借りしています。金剛輪寺のもの⁸と京都の細見美術館のものです。細見さんのものは、近江八幡市の浄厳院^{じやうげん}伝来とされています。

4章は密教の曼荼羅や法具類ですが、展示では中央のケースに、多賀町敏満寺^{とがまちみんじゆ}の金銅大日如来坐像⁹が置かれていますね。

桑原 天台密教の寺として天皇や皇族からも崇敬を受けていた敏満寺は、戦国時代になると浅井長政と織田信長に相次いで攻撃され、これは数少ない遺品の一つです。鑄

銅製ですが、全体が一つのかたまりではなく、台座は各部が別鑄で、組み合わせで鉄釘で固定してあります。

それから、珍しい展示として、仏像の光背が並んでいます。

桑原 一番大きなものが、洞照寺の木造阿弥陀如来坐像光背¹⁰です。平安時代の造像時の光背が伝わる非常に貴重なもので、13体の飛天がみなすくすきれいなお顔をされていて、天衣の表現なんかすくく柔らかにくてきれいなんです。そうした脇役に注目していただける機会かと思っています。

5章に来て、先の話にも出た動物の姿を取り込んだ神仏の最初は、滋賀県でも竹生島の女神としてなじみのある弁才天。

桑原 当館所蔵で、明治の神仏分離令以前は江の島（神奈川県）のお寺にあったと伝わる展示品は、お姿は竹生島のものとはほぼ同じです。どこに動物がいるのかというと、頭上にとぐろを巻いたかつこうで、頭は老人、体はへびの宇賀神^{うがみかみ}がいます。次は白狐の背にまたがった女神、茶吉尼天^{ぢきにてん}の図像です。この女神の頭上にもやはりとぐろを巻いた宇賀神^{うがみかみ}がのついています。

茶吉尼天のまわりを眷属^{けんじゆく}が囲んでいる甲良町下之郷^{こうかみ}のもの¹¹には、中央下に男と女がいるのですが、男は鳥足に魚の尾、女はキツネの足と尾をもつ異形^{いぎよう}です。他県に伝わる複数の図像にも描かれているのですが、何を意味するのでしょうか。茶吉尼天・毘沙門天・吉祥天の三尊を描いた市神社^{いちがみ}のもの¹²の茶吉尼天の頭には、キツネとへびがいます。

訳のわからなさで印象に残ります。

桑原 ちょうど2015年に長野市立博物館

館の「狐にまつわる神々」という企画展を担当なさった竹下多美学芸員^{たみしゆ}にお願いして、本展図録のコラムと作品解説を執筆していただきました。コラムで竹下さんは、インドで墓場をうるつき人肉を食べる夜叉^{やしゃ}だったダーキーニーが日本に伝来すると弁才天の変種に姿を変え、その相棒ジャッカルがキツネに変わって稻荷信仰と結びついたそう、茶吉尼天を「最強の合体尊」と評しておられます。

次の6章は若冲の作品がメインですが、一般的な涅槃図^{ねはんず}の例として置かれている「大涅槃図」^Aは、北近江で浅井氏家臣の子に生まれて絵師となった海北友松^{かいほうゆうしやう}の子、友雪の門人・海北友賢^{かいほうゆうけん}の作ですね。

桑原 友賢の「大涅槃図」には、写実的に動植物が描かれているので、今回、滋賀県立琵琶湖博物館の有志の方々とともに、画中の動物が何かを調べてみました。右上隅に飛んでいるツバメから、左下隅の白象まで109種のうち、不明が二つありましたが、なんとか同定してみました。空想上の動物や、日本には棲息せず、剥製^{はくせい}のみが伝来しているトラやヒョウは毛並みまで細かく描かれています。魚貝類や昆虫もけっこうあります。

7章の古神宝では、桑原さんが本誌112号の新撰淡海木間撰でご紹介なさった「雷雲時絵螺鈿鼓胴」^{うみくもときえりぞんこどう}が出展されていますね。

桑原 この鼓は、静御前^{しづみけみ}（源義経の側室）の持ち物で、雨乞いの時に用いられたという伝承をもち、雲間に走る稲光を螺鈿で表しています。源持信が竹生島神社に奉納し、織田信長が「名物」として一時借り出したことがわかる書状もついた名器です。

8章「神の乗物」は……。

次ページ
写真

3 甲賀寺跡出土瓦（甲賀市教育委員会／滋賀県埋蔵文化財センター）
7 金銅唐草文両面盤（百済寺）
8 金銅透彫蓮華文華鬘（金剛輪寺）

12 茶吉尼天曼荼羅図（市神社）
A 大涅槃図 海北友賢筆（京都・清浄華院）
B 火伏神輿（神奈川県・協同組合伊勢佐木町一・二丁目商和会）

17 △近江八景欄間彫刻（大津市中京町自治会）
20 波瀾に飛龍文様後幕（水口繁作坂町）
21 △玉取獅子図内幕（水口祭天神町）



桑原 滋賀県からの出展はないのですが、横浜の伊勢佐木町・2丁目商和会からお借りした神輿^Bの正面と背面の扉の左右にいる獅子は、名工・高村光雲が、栗東市にある大宝神社の木造狛犬（重要文化財）をモデルに制作したものです。ちなみに、屋根の上の鳳凰は、平等院鳳凰堂の鳳凰がモデルです。この神輿は大正13年（1924）に完成した比較的新しいものですが、図案設計から塗りまで当時の名工が担当し、すみずみまで贅を尽くした名品です。

つづく9章では、道を行く行列と見物人の姿を描いた絵巻や屏風が並びます。

桑原 京都・賀茂祭などの行列を描いた「年中行事絵巻模本」は、鳳輦（天皇の乗り物）や馬につけられた唐鞍などを注意してご覧下さい。滋賀県関係では、多賀大社の「参詣曼荼羅図」¹³、東京国立博物館蔵の「竹生鳥祭礼図」、滋賀県立近代美術館蔵の「近江名所図屏風」¹⁴、「日吉山王祭礼図屏風」は祇園祭と対になったサントリー美術館蔵のものなど3作品が出展されます。

そして、最後の10章「滋賀の曳山祭」。

桑原 今回の展示では、「懸装品」と呼ばれる曳山を飾る襷絵や見送り幕などを紹介しています。まず、長浜の鳳凰山の楽屋襷ですね。舞台の裏にあたる部分なので、普段は見られない。子ども役者が出るために襷を開けた一瞬しか見られない部分ですが、それが、狩野永岳筆「楽太鼓図」¹⁵で、雅楽で用いる太鼓と紅葉を描いています。

——極彩色ですね。

桑原 同じく長浜市では宮司町で昭和27年まで子ども歌舞伎が演じられていた宮川祭に登場していた曳山「蛸々館」の楽屋襷です。「虎の岸駒」と呼ばれた岸駒による「松虎図」¹⁶で、岸駒の日記に、享和4年（1804）1月19日、宮川村から曳山の

襷の注文があった、いついつ下塗りをしたなど、制作過程の記録が残っています。

次は、大津祭の源氏山についている「近江八景欄間彫刻」¹⁷。源氏山はその名とおり、紫式部のからくり人形があるのですが、紫式部が「石山の秋月」を表して、「近江八景」の残り7景が彫刻で表されています。

享保3年（1718）という、かなり古いものですね。

桑原 これはまだ現役のはずです。

——これは、現実のままの立体ではないんですね。下から見上げた角度で見るときれいな立体に見えるけれど、奥行きがそれほどないから別の角度からだとひずんでいる。

桑原 そうなんです。今の展示では来館者が見下ろす形になってしまっているので、正しく見えないんです。何か下に置いて角度を調整するか、しゃがんで見ていただく必要があります。

次も大津祭で、湯立山の「神馬図 胴懸」¹⁸と石橋山の「飛翔鶴図 水引幕」¹⁹は、日本製の刺繍です。幕はヨーロッパや中国から購入された綴織絨毯や壁掛けなどを転用したものが有名なのですが、これらの日本製のものもなかなかの名品ぞろいです。「神馬図」は下絵が円山応挙で、馬につけられた豪華な唐鞍に注目してください。

見えてくる歴史の流れ

桑原 ざっと見ていただいた「かざり」展をおさらいしますと、初めに神仏や天皇に使われていた「かざり」が、貴族や武士に広がり、やがて、いろいろなお祭りの場合などで町人が目にして取り入れる、そんな流れが歴史的にはあったといえるだろうと思います。

——経済力のあった集団がどこにいたかというのは、この変遷でわかりますね。

※6 ウナギイヌ 赤塚不二夫の漫画「天才バカボン」に登場するキャラクターで、イヌとウナギのハーフ。

「飛翔鶴図」は下絵が天津出身の中島来章で、よほどよい職人が刺繍をしているのか、羽毛の細かな再現も、全体を見た時の動きのある感じもすばらしいと思います。

そして、最後は甲賀市の水口祭です。

桑原 水口町作坂町の「波瀾に飛龍文様後幕」²⁰と、天神町の「玉取獅子図内幕」²¹です。前者は明から清にかけて（17世紀）の中国宮廷で本来は官服用に織られた布だったと推測されます。後者は、朝鮮王朝時代（16世紀）に織られた朝鮮毛織だと考えられます。

——これは対照的な2枚ですね。前者は、デザイン的に洗練された竜ですが、後者は未完成品ですし、獅子が漫画チックで……。

桑原 そうなんです。じつは天神町の町内代表、私よりちょっと若いぐらいの世代の方は、「子供の頃からこの幕を見ているけど、ずっとウナギイヌみたいだと思っていた」とおっしゃっていました（笑）。

まさに！古さを感じさせない絵です。

桑原 この種の朝鮮毛織は、日本の祇園の山鉾町に36枚と水口のこの1枚しか残っておらず、詳細はわかっていないようです。

桑原 お祭りという視点からいえば、美しい最高水準の芸術作品が中心にあり、大勢の見物人が集まってきてお酒や食べものを楽しむ場だったとすると、今回の「かざり」展もお祭りみたいなものかもしれない。ちょうど4月から5月はお花見や春祭りのシーズンでもありますし、その延長でご来場の皆さんには楽しんでいただければと思います。

（2016.3.4）

「朝霧の川」 中路融人

東近江市近江商人博物館学芸員 上平千恵

この絵は、湖国の原風景に心惹かれ、60余年もの間、その風景を追い求め、描き続けた日本画家・中路融人（文化功労者・日本芸術院会員）の作品です。
その作品に向き合うと、画面からは不思議と肌寒い季節の凜とした空気や水辺の潤い、土や木々の匂いも感じられるような気がします。



東近江市の名誉市民でもある中路画伯の創作の原風景は、幼い頃、母に連れられて訪れた東近江市にありました。「大きな杉に囲まれた鎮守の森やコブナやモロコが釣れる曲がりくねった小川がたんぼの間を流れ、のどかな田園地帯が広がっていました」と当時を回想されています。
今回ご紹介したこの絵のようなうねった小川や田園の中に榛の木が立ち並ぶ風景は、かつて滋賀県でよく見られました。県下では昭和50年代から急速に圃場整備がすすめられ、こういった風景が次々に消えていきました。その消えゆく風情を追いかけるように、何度も何度も湖国に足を運び、デッサンし続けたといえます。

一枚の作品の創作をひもとくだけでも、滋賀県の歩みの一端を顧みることができます。

「水と木が私の創作の舞台装置だ」と語る中路画伯は、デッサンを大切にし、雪に輝く伊吹山や榛の木の立ち並ぶ田園風景、葦がゆれる琵琶湖畔など、自らが心ゆさぶられた一期一会の表情を豊かに表現されています。

このたび中路画伯から、長年にわたり制作された多数の日本画が東近江市に寄贈され、これらの作品を多くの人びとに鑑賞していただくために、平成28年4月17日に中路融人記念館をオープンすることになりました。

日本画家・中路融人画伯が心惹かれた湖国の情景との出会いが、滋賀県の新たな魅力の発見につながるのではないかと期待しています。

● 中路融人記念館開館 特別無料観覧会

4月16日(土) 午後2時～午後5時

プレオープンとして、無料で入館していただけます。

● オープン記念展「中路融人の世界 ―湖国の風景に魅せられて―」

4月17日(日)～7月24日(日) 「11ページ参照」



中路融人記念館
(近江商人博物館2階)



木造十二神将像 (第2号像)

休館日：月・火曜日（祝日は開館）

入館料：一般300円、小中生150円

※5月3～5日は無料入館日（国際博物館の日）

■ギャラリートーク

「近江の神将像とその魅力」

5月15日(日) 午後1時30分～3時

講師：高梨純次氏（秀明文化財団参事）

参加費：無料

お問い合わせ先：TEL 0749 (37) 4500

戦時下の滋賀師範

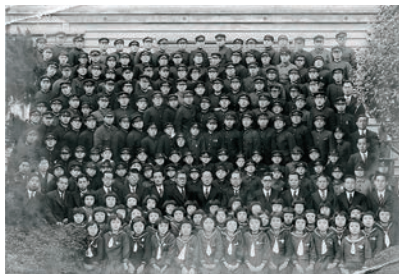
— 昭和18年の卒業生 —

開催中～6月19日(日)

滋賀県平和祈念館

現在の滋賀大学教育学部は、「滋賀師範」の名で親しまれた戦前の師範学校を母体としています。戦争末期の昭和18年、戦況悪化で不足した戦場の指揮官や航空兵を補充するため、旧制中学校以上の学生・新卒業生が大々的に動員されました。

教員を志した若者がいやおうなく戦争に巻き込まれたようすを紹介します。



滋賀師範学校 昭和18年の卒業生

(吉田亀治郎さん提供)

付属国民学校の卒業記念写真に、交流の深かった教生として同席したものの。

近江の老農 大岡利右衛門

開催中～5月29日(日)

野洲市歴史民俗博物館（銅鐸博物館）



大岡利右衛門肖像画（大岡家蔵）

老農とは、農業指導者のことです。野洲市比留田出身の大岡利右衛門は、近代の老農として活躍した人物です。本展は、農事改良に生涯を捧げた大岡を紹介します。

休館日：月曜日・5月6日

入館料：大人200円、高大生150円、小中生100円

■市史・郷土史講演会

「『老農時代』の技術と思想」

5月28日(土) 午後2時～4時

講師：西村 卓氏（同志社大学経済学部教授）

会場：野洲市歴史民俗博物館研修室

定員：120名 参加費：要入館料（申込不要）

お問い合わせ先：TEL 077 (587) 4410

金剛輪寺木造十二神将像保存修理完成記念
春季特別展

十二神将と四天王

— 武将形の守護神 —

4月16日(土)～6月5日(日)

愛荘町立歴史文化博物館

天台の古刹、金剛輪寺に伝来する鎌倉時代の木造十二神将像は、造形的に優れた作例であることから、平成24年3月に愛荘町指定文化財に指定され、その後3ヵ年かけて保存修理が行われました。

本展では、十二神将像12軀を修理後初めて公開するほか、同じ武将形の守護神である木造四天王立像（江戸時代・仏心寺蔵）を紹介します。

米原の石造物・近江の石塔写真展

— 祈る・集う・造る —

開催中～4月24日(日)

米原市伊吹山文化資料館

石の加工を生業としてきた曲谷集落があり、五輪塔や道標などの石造文化財の残る米原は、生産地と消費地をもつ石造物のまちです。米原市内の石造物の写真とともに、伊吹山文化資料館友の会の元副会長・梅原義夫さん（故人）撮影の近江の石塔の優品を紹介します。

休館日：月曜日・祝日の翌日

入館料：大人200円、小中生100円

お問い合わせ先：TEL 0749 (58) 0252

ユネスコ無形文化遺産登録推進 企画展

長浜型曳山の系譜

— その成立と伝播 —

開催中～4月17日(日)

第1会場 長浜城歴史博物館

開催中～5月8日(日)

第2会場 曳山博物館

旧魚屋町組山建地割図
文政年間 藤岡家大工資料

長浜曳山祭の曳山に代表される舞台附曳山は、江戸時代中期（18世紀前半）に長浜で完成したと考えられ、この「長浜型」が、江戸時代後期以降、西美濃や北陸地方へ伝播していきます。本展では、「長浜型」を造った大工・藤岡和泉家の資料を中心に、各地の長浜型曳山模型や資料、他地域の山車模型等を展示します。

休館日：会期中無休

入館料：第1会場 大人400円、小中生200円

第2会場 大人600円、小中生300円

お問い合わせ先：第1会場 TEL0749 (63) 4611

第2会場 TEL0749 (65) 3300



歌集 泡 (Abuku)

岩根敏子 発行
四六判上製本 総206頁 非売品

問合せ TEL0749 (22) 0627 (サンライズ出版)

あの世より帰りたい人誰もなく楽しさうな気もする怖い様な気も——脳出血後のリハビリとともに作歌に励んだ著者、最後の歌集。2016年3月31日没、告別式参列者に配布。(2015. 4.20刊)

くちまご 口孫縮緬 二百年のあゆみ

木村茂雄 企画・編集／木村孫次郎 発行
A5判並製本 総40頁 非売品

問合せ TEL0749 (22) 0627 (サンライズ出版)

湖北の地で最も長きにわたり浜縮緬を生産してきた「口分田の木村孫一」、略して「口孫」。昭和初期の工場増築、戦後の繁栄など、その歩みをまとめる。(2015.12.20刊)



子どもの頃の百姓屋はん

川北泰助 著
B6判並製本 総98頁 非売品

問合せ 三重県伊賀市種生 2979 (著者)

米作りは、肥料となる山の草刈りから始まる。昭和11年に小学校に入学した著者が、当時の農作業(養蚕と炭焼きをふくむ)と、農学校在学中に早世した兄との遊びを回想。(2016. 3.10刊)



西浜千軒遺跡

—琵琶湖湖底遺跡の調査・研究—

中川 永 編著

A4判並製本 総100頁 非売品

問合せ TEL0749 (22) 0627 (サンライズ出版)

退任した林博通教授の調査を引き継ぎ、学生主導で続けられた琵琶湖の水中遺跡調査。室町時代の大地震で集落が水没したと伝わる長浜市の湖底で確認された遺物の数々。(2016. 3.31刊)



石田三成に逢える近江路

MEET 三成展

5月14日(土)～11月30日(水)

彦根・米原・長浜の3会場で、NHK大河ドラマ「真田丸」における石田三成をテーマとした企画展示や三成が生きた時代を紹介するパネル展示など、石田三成をさまざまな角度から紹介します。

彦根会場

真田丸にみる
石田三成と
激動の佐和山城展

■会場：開国記念館

■入館料：無料

米原会場

運命・米原企画展

■会場：観音寺本坊

■入館料：無料

長浜会場

真田丸ゆかりの
武将展

■会場：

- ①長浜市 曳山博物館
- ②湖北観光情報センター

■入館料：無料

お問い合わせ先

びわ湖・近江路
観光圏活性化協議会

彦根市観光企画課

TEL 0749 (30) 6120

米原市商工観光課

TEL 0749 (58) 2227

長浜市観光振興課

TEL 0749 (65) 6521

休館日：月・火曜日

入館料：無料

■戦争体験を聞く会

「昭和18年の滋賀師範」

4月24日(日) 午後1時30分～3時

語り部：長谷川良治氏

(大正12年生まれ、野洲市在住)

会場：研修室 参加費：無料(事前申込不要)

お問い合わせ先：TEL 0749 (46) 0300

中路融人の世界

—湖国の風景に魅せられて—

4月17日(日)～7月24日(日)

東近江市近江商人博物館・中路融人記念館

てんびんの里文化学習センターの2階をリニューアルして「中路融人記念館」をオープンします。現代日本画壇を代表する中路融人画伯が心惹かれ、長年にわたり描き続けてきた湖国の原風景。一期一会の自然の表情に真摯に向き合い、情緒豊かに描いた作品を紹介します。

入館料：大人300円、小人150円

休館日：月曜日(祝日は開館)・祝日の翌日

■作家によるギャラリートーク

4月29日(祝) 午後1時30分～

参加費：要入館料(申込不要)

【同時開催】リニューアル記念特別展

ふるさと蒲生野を愛した洋画家
野口謙蔵

東近江市近江商人博物館・特別展示室



「冬」 野口謙蔵

中路融人記念館開設を記念して、東近江市ゆかりの作家を紹介。蒲生野に生まれ、蒲生野を愛し描き続けた洋画家、野口謙蔵(1901～1944)の作品を展示します。

お問い合わせ先：TEL 0748 (48) 7101

江戸時代 近江の商いと暮らし
湖国の歴史資料を読む青柳周一／東幸代／岩崎奈緒子／母利美和 編著
四六判上製本 総318頁 3000円＋税

滋賀大学と滋賀県立大学、サンライズ出版から成る「おうみ学術出版会」の刊行書籍第1弾。第1章では従来の「近江商人像」の刷新を試み、第2章では近江の地に生きた人びとの多様な暮らしぶりを掘り起こす、全12編の論考を収録。



淡海文庫55

世代をつなぐ竜王の祭り

苗村神社三十三年式年大祭

武田俊輔 編著／滋賀県立大学式年大祭調査団 著
B6判並製本 総232頁 1200円＋税

平成26年10月、竜王町の苗村神社で33年ぶりに行われた式年大祭。山車や鉦・踊りなどが氏子総出で奉納される祭礼の準備から執行までを記録。



書物への愛

ごぶんこ
桜田御文庫と新井白石(仮称) 新井白石記念館の設立を応援する会 編
B5判上製本 総304頁 非売品

問合先 千葉県君津市坂田1585 (編者)

研究活動の成果をまとめた三部作の最終巻。学習・研究活動報告と新事実の発見や訂正を盛り込んだ論文を収録。(2016.3.31刊)



しもまつき

日野町下駒月のお話
その歴史と伝承

横井邦彦 著／西照院 発行

A5判並製本 総40頁 頒価1600円＋税

問合先 蒲生郡日野町下駒月1059 (発行者)

70戸余りの小集落・下駒月にある西照院の住職である著者が、平安時代以降の出来事や時代ごとの文化財を解説。(2016.4.1刊)

滋賀県で大切にすべき野生生物
滋賀県レッドデータブック2015年版4月
下旬
発売滋賀県生きもの総合調査委員会 編
A4判並製本 総648頁 3500円＋税

5年ぶりの改訂により、絶滅危惧種などカテゴリー別に1439種を収録。50ページ以上のカラーグラビアに500種余りの写真を掲載。2010年版から選定種は152種増加し、特に昆虫類ではゲンゴロウなど7種が絶滅種に加わった。



石田三成の青春

松本匡代 著

四六判並製本 総352頁 1700円＋税

戦国の知将・石田三成の若き日々。のちの天下人・豊臣秀吉との出会い、親友・大谷吉継との関ヶ原への誓い——三成の家族や恋人、妻子も登場させ、等身大の人間・三成の姿を描く戦国青春ノベル。

堤豊宏「書」の世界
私の生き方修行

堤 豊宏 著

210×200mm 並製本 総46頁 非売品

問合先 彦根市正法寺町451-46 (著者)

禅僧の墨跡に心ひかれ、40年余り、ドイツなどでも個展を開催してきた著者の選暦を記念した作品集。(2016.2.10刊)



舞台機構屋が語る舞台の魅力

若狭忠治 著

A5判並製本 総202頁 非売品

問合先 米原市入江 259-32 (著者)

半世紀にわたり、市民会館や芸術劇場などの設計・建設に携わってきた著者が、若い技術者の参考になればと、舞台機構の歴史と仕組み、古典芸能の魅力をまとめた一冊。(2016.2.25刊)



表紙写真 飛翔鶴図水引幕 大津祭石橋山 (部分) 大津市石橋会蔵

刺繍によりタンチョウヅルの羽毛が表現されている。(8ページ参照)

編集後記 特集記事の補足です。会期中に陳列替えが行われるので、紹介している作品でも陳列されていない場合があります。チケット売り場やレストランがあるレセプション棟から本館へ向かう道の両側には、約80本のしだれ桜が植えられていて、例年4月中旬に満開となるそうです(その後の葉桜もきれい)。送迎の電気自動車は使わずに、歩くのもよいかもしれません。 ㊦

Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1

サンライズ出版株式会社 Duet 編集部

TEL (0749) 22-0627 FAX (0749) 23-7720
(振替) 01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。

<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

お申込先